



和歌山市立西脇小学校の
目の前にある南海加太線
二里ヶ浜駅。教室の窓か
ら見える「めでたい電車」
に児童たちは大喜び。

地域の人人々と 鉄道会社の 絆から始まる物語。

南海加太線・めでたい電車



加太線応援シール
2014年のプロジェクトの開始から
お土産物などに貼られているシール。
地道な広報活動ではあるが、
地元の協力をなくしてはありえない。



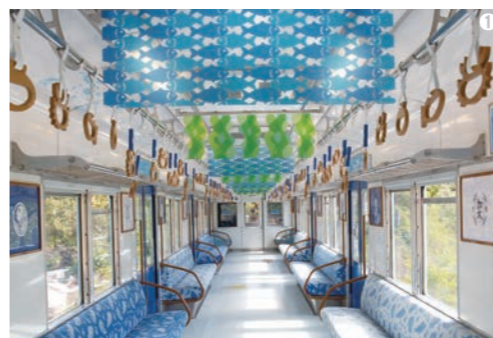
(左)加太観光協会会長の稲野雅則さんは両親とも加太生まれという生粋の加太っ子。地域活性化協議会や加太まちづくり株式会社にも所属し、多方面から加太の観光活性化に携わっている。

加太観光協会
住所／和歌山市加太1067 電話／073-459-0003

和歌山市駅から南海加太線で約25分。辿り着くのは、万葉の時代から景勝地として知られる加太。遠浅の海水浴場からは日本遺産「葛城修験」の始まりの地である友ヶ島を臨むことができ、1700年の歴史を誇る淡嶋神社を中心とした、関西でも有数の観光地である。「その観光地に観光協会ができたのはなんと昭和元年なんです」と語るのは加太観光協会会長・稲野雅則さん。1965年頃には1日平均5千人が加太駅を利用していたというが、観光客や住民人口の減少で利用客は最盛期の20分の1以下に。このままでは地域住民の移動手段が維持できなくなると考えた南海電鉄は、2014年「めでたい電車プロジェクト」をスタート。そして加太観光協会に協力を仰いだ。「注目を集める電車を走らせ、利用客の増加を目標しました。しかし観光客を増やすには地域の魅力を発信することが重要だと思い、利用客でもある地域の皆様に協力を求めました」と語るのは南海電鉄の佐々木亮さん。こうして公共交通機関と住民たちの

熱い絆が生まれた。まず「さち」という電車が登場し、夫の「かい」、子供の「なな」という可愛い電車が立て続けに運行されることに。また様々なイベントを開催することで認知度も上がり、観光客も徐々に増えてきた。さらには沿線にある小学校の子供たちからも好評で、休憩時間に教室の窓から「めでたい電車」が走っているのを見かけると手を振ることも。「実は「めでたい電車」を好きなのは、子供たちだけではないんです。通勤の途中、踏切で電車の通過を待つ大人たちも、今日は「かい」に出会ったからいい日になるに違いないとか、都市伝説みたいなものまで生まれています(笑)。また大阪や関西国際空港へのアクセスもよく本数も多い。そういう意味では加太は単なる「田舎」の観光地というだけでなく、移住にもおすすめの便利な「田舎」なんです」と稲野さん。

「めでたい電車」プロジェクトは、南海電鉄の経営戦略のひとつであるが、地域住民にとっても大切な移動手段を守るためでもある。互いの思いが寄り添い、支え合う。地域と地域を支える公共交通機関の新しい物語が始まっていた。



①「めでたい電車・かい」の車内。座席シートからつり革までオリジナルデザインで、遊び心満点の内装にドキドキ。写真映えすると若い女性を中心に観光客が増えたという。②2019年3月31日に行われた「めでたい電車・なな」の誕生日イベント。観光客はもちろん、地元の小学生たちもお祝いに駆けつけた。
南海テレホンセンター
電話／06-6643-1005
(8:30~18:30)年始を除く

地域と共に走る路線